

推理百貨店

本館

新保博久



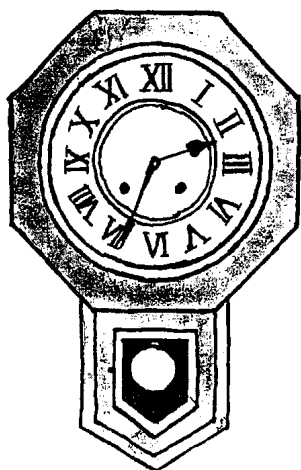
冬樹社

新保博久

推理百貨店

本館

冬樹社



推理百貨店 本館

一九八九年八月六日 第一刷発行

著者 新保博久

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都新宿区荒木町23 〒一六〇

電話 ○三一二五―四七三一

印刷所 株式会社 七光社

製本所 小高製本工業株式会社

定価は表紙カバーに表示してあります。

© 1989 Hirohisa Shimpō ISBN4-8092-3039-2 C0095

推理百貨店

本館目次



開店の辞 目録をめぐるモノローク 9

安楽椅子で見るスポーツの夢 16

文章力とラケットさばきは反比例する——テニスの本10冊 22

発展途上S U K E B E 諸氏に捧ぐ——水着の本10冊 27

微着二・背腹裂・割無被子 31

スポーツショップ

化粧品 顔は汚物である 36

ドラッグ 早分り毒殺チャート 39

猫と犬の危険な関係 44

犬のミステリ散歩 47

1 名探偵、生かすも殺すも犬しだい

2 犬の名探偵紳士録

3 アガサ・クリステイ愛犬記——推理界の女王はテリアが大好き

4 双頭の犬エラリー・クイーン

5 メグレ警視の犬好き度は?

6 刑事コロンボの犬は飼主そっくり?

7 タフな男こそ犬には優しい——ハードボイルド・ドッグ

8 冒険行の最良の友——冒険小説の犬たち

9 犬がいには書けないドッグ・パニック

ペットショップ

喫煙所
電話

煙と消えた本たちよ——煙草の本10冊
ダイヤルMは全国直通 106 102

- 10 犬のいる密室殺人
- 11 かしい犬とドジな人間たち——ユーモア・ミステリの犬
- 12 推理作家の愛犬はミステリアス?
- 13 ブロードウェイの犬と猫

Say It with Mysteries 花のミステリ 110

- 1 花言葉は、手がかり
- 2 花は知っていた
- 3 怪談の季節
- 4 妖怪的植物
- 5 探偵グリーン氏紹介
- 6 羊歯に死す
- 7 クリスマスツリーの下で
- 8 犯人は竜舌蘭
- 9 毒薬としての植物
- 10 麗しき毒殺者
- 11 薬草園は悪の温床
- 12 美しき五月の罌
- 13 SFの中の植物

フラワーショップ

玩具	迷子案内	大食堂	WC	時計靴	葬礼用品	事務用品 家具
奇術趣味はほどほどに……—トリックの本10冊 絶対に見解されない暗号はあるか——暗号の本10冊	進化する誘拐 150	カレーを甘く見るな 156 百花〃騒動〃始末記 159	せっちゃんレポート 166	死に至る靴 174 時刻のほかにも時計は教える 177 パラボックスのない時間旅行なんて……—時間の本10冊	ジャンル別被害者調査 186 死体置場に御招待——ミステリにおける殺し方の研究 198	椅子は人なり 218 日記には早すぎる 221 小説にも匂があつていい——カレンダーの本10冊 224

ミステリ歳時記 230

シーズン催事場

- 1月 探偵たちは正月も休めない
- 2月 シュプールを鮮血に染めて
- 3月 難まつりに事件はない
- 4月 新入生のための探偵学入門
- 5月 母と子に捧げる殺意の贈物
- 6月 不運なジューン・ブライド
- 7月 プールの底で死体とデイト
- 8月 テニスコートに死神が待つ
- 9月 遅ればせながら怪談の季節
- 10月 秋の夜長にファンタジーを
- 11月 死の彩りも紅葉から初雪へ
- 12月 サンタクロースが死を運ぶ

警備室

人をだますのは快感である——詐欺の本10冊 278
正しい判決を下すには上下巻必要か——裁判の本10冊

282

推理百貨店・別館(イベント館)目次
ギヤラリー

ハウジング・センター

ミステリの家 (画/穂積和夫)

ミステリの家

- 1 舞台の研究——はじめ——バスカヴィル家の犬
- 2 ハッター邸とグリーン屋敷——Yの悲劇
- 3 まるで舞台劇のような——マルタの鷹
- 4 世界一有名な被害者の家——アクロイド殺害事件
- 5 黄色い部屋の、人気の、秘密——黄色い部屋の秘密
- 6 空中楼閣への招待——黒死館殺人事件
- 7 はるかモルグ街を離れて——アッシャー家の崩壊
- 8 明るく楽しい殺人現場へ——赤い館の秘密
- 9 逆境の象徴としての厩舎——興奮
- 10 裏町に生きる庶民の心意気——メグレ警視シリーズ
- 11 童謡殺人、ここに始まる——僧正殺人事件
- 12 和風密室、死体二個添え——本陣殺人事件

カルチャーセンター

死人は俳句を詠まない
正しい新人賞のとり方

TV映画のこと、及び映画に行かなくなったわけ

横文字の幽霊

トラベルサービス

暗号名はE K I B E N
旅にはミステリが似合う

死出の旅にも切符は必要

殺人のための回り舞台——山手線ミステリ紀行

易占トリックはお好き?

ゲームショップ

コントラクト・ブリッジへの招待

閉店の辞/テーマ別一覧/作者別・書名総索引

推理百貨店

本館



●本文中、やむを得ず犯人、トリック等を明かした場合、にて示しました。不都合な方は、その部分を飛ばしてお読み下さい。

目録をめぐるモノローグ

中学生だったころ、創元推理文庫の目録を作ろうと思った。なぜか便箋で作ろうとした。学生がふだん使うレポート用紙はヨコ書きだから、図書目録にふさわしくないと考えたらしい。

当時の創元推理文庫は今みたいに作者別に整理されておらず、ハヤカワ・ポケミスのようにほぼ刊行順に一冊ずつ三桁の整理番号が付いていた。101『黄色い部屋の謎』に始まり、102『赤い館の秘密』、103『凶悪の浜』（ロス・マク）、104～107にはヴァン・ダインが四冊続く。SF部門は七〇〇番台にまとめられており、701～711は火星シリーズで占められていた。

手製目録の作り方はこうである。まず便箋の各行の頭に101から番号をふり、手持ちの本の書名を該当番号の下に記入してゆく。貧しい蔵書だけでは全然埋らないので、そこから類推が始まる。シリーズ物はいいたい一箇所固めてあったから、例えばクイーンの国名シリーズ全十冊は第二巻、141『フランス白粉の謎』を持っていただけで、140～149までの書名が判明するのである。これで満足して、以後国名シリーズは買わなかった。新たに創元推理文庫を買い込んでくると、ただちに番号を調べていそいそと記入する。乏しい小遣いでは何冊も買えないため、本屋でいくつか番号を暗記

して家に帰り、空欄を埋めてゆく。こんなことに時間と頭を使っていたのだから、学校の成績が悪かったのは当り前だ。

この便箋目録がいくらか完成に近づかないうちに、ある日、本屋に創元推理文庫解説目録が山積みされているのを発見した。今様にきらびやかな表紙のついた奴ではなく、文庫のカバーをはがした中味と同じ意匠であった。これがこの世に文庫目録なるものの存在を知った最初でもあるが、とにかくこの発見によって、数ヶ月間の努力の結晶はたちまち紙クズとなり果てた。

解説目録と便箋版をつき合せたところ、類推にかなり誤りがあることがわかったが、もはやどうでもいい。それより解説目録を見て、数十冊の品切書目があるのを知った興奮のほうが大きかった。『幽霊屋敷』『ペテン師まかり通る』『怪盗レトン』『名探偵群像』『俳優パズル』『幽霊の2／3』『夜は千の目をもつ』『ストリップの女』等々、題名からして面白そうなものばかりである。東京創元社は意地悪くも面白くも本から順に絶版にしているのではないかとカングったほどであった。現行の目録では品切書目は全く記載されていないが、当時はすべて在庫分と同じに内容解説も書かれていて、整理番号の肩に*印が付いているのが品切のしるしだった。その解説を読むとますます手に入らない本ほど素晴らしく思えたものだ。

この様式の目録は確か一九六八年二月版を最後に改まり、以後品切書目を抜いたイラスト表紙のが登場したと記憶する。変った当座の目録は表三（裏表紙の裏）に品切書目一覽を掲げていたが、やがてそれもなくなった。六八年二月版の目録は今も手もとにあるので、ついでにこの目録を見て、面白そう、なミステリ・ベスト10を選んでみよう。（旧整理番号順、*印は当時品切）

ヴァン・ダイン『カシノ殺人事件』

P・マガー『探偵を捜せ!』*

H・セシル『メルトン先生の犯罪学演習』

C・ロースン『棺のない死体』*

T・マシスン『名探偵群像』*

A・グリーン『ボデイを見てから驚け!』*

W・アイリツシュ『夜は千の目をもつ』*

F・ブラウン『まっ白な嘘』

H・ユースティス『水平線の男』*

S・ジャプリズ『シンデレラの罫』

ヴァン・ダインは『僧正殺人事件』や『グリーン家』より『カシノ』のほうが面白そうに見えるから不思議。過半が品切だが、その後ほとんど重版された。『夜は千の目をもつ』のように改訳されたものは、目録の解説も大幅改訂されているので、旧目録の文章を全文引用しておく。

「青年刑事シヨーンはある夜、飛込自殺をしようとした美少女を救ったことから奇妙な話を聞くことになった。彼女の話によると、近所に不思議な予言能力を持つ青年がいて事実百発百中の的中率を持っているという。その青年が少女の父の死期と死因を予言したというのである。超自然的予言者と合理主義的近代警察との闘いが開始される」

これが現行の目録だとうなる。

「星のふる晩、青年刑事ショーンは、川に身を投げようとしている娘を救った。彼女の父親が死を予言されたというのだ。予言者は今まで正確きわまりない予言をしてきた謎の人物だという。父親は実業家であり財産家だった。犯罪計画の匂いがありはしまいか？ ショーンの要請で警察の捜査が開始された。アイリッシュの真骨頂を示す不朽の名作」

現行版だったらベスト10に入れなかったかも知れない。「美少女」がただの「娘」に替り、「近所の不思議な青年」がいかがわしい「謎の人物」になっている。何よりも「真骨頂を示す不朽の名作」などという空疎な宣伝文句がいけない。翻訳そのものは良くなったのだろうが、総じて昔の目録のほうが夢がありましたな。

思えば、これら品切書目を求めて古本屋まわりを始めたものだ。古本屋でなくとも新刊書店でも、往時はまだ店によっては版元品切本が棚ざらしになっていた。だから欲しい本はあらかじめ手に入ったが、実際に読んでみるとそれほどないものが大半であった（むしろ、目録によれば「雑貨店の老婆殺し」というので全く食指の動かなかったレオ・ブルースの『死の扉』が、絶版群の中で最も面白いくらいと知ったのは後年である）。悪い癖で品切と知ると読みたくなくても買ってしまうもので、京都の新刊屋にはごろごろしていた『反逆者の財布』もつい求めた。これが退屈きわまる代物だったためアリンガムという作家がすっかり嫌いになり、その後ポケミスで『幽霊の死』『判事への花束』を見つけても敬遠したのは痛恨。

続いてはポケミスの目録『ハヤカワ・ミステリ図書目録』の話をしなければならない。こちらに初めて出会った時は、創元の目録を見つけた時ほどの感激はなかった。しかし何が収録されている

かさっぱり分らない点では、創元推理文庫よりポケミスのほうが上だった。書店に積んであったのをただ貰うのは気がひけたので、何かポケミスを買うことにしたが、そのころは007やナポレオン・ソロの全盛期で欲しいものがない。当時フレドリック・ブラウンのSFに入れこんでいたせいで、結局カーター・ブラウンの『宇宙から来た女』を購った（全然関係ないか）。本当はこれがいちばん薄くて良かったのである。

かくて手に入れた目録は〔第2集の1〕となっていて、No.749-964までしか載っていないかった。それでも巻末に著者別索引が付いていたのでポケミスの全容は知り得たのだが、何より驚いたのは日本人作家による『殺人鬼』『黒死館殺人事件』『ドグラ・マグラ』が入っていたことである。当時の読書傾向は翻訳物一辺倒だったから、ポケミスに入る日本ミステリとは一体どんなものだろうと想像をたくましくした。それで『黒死館』が桃源社、『ドグラ・マグラ』が三一書房からそれぞれ出ると飛びついたのだが、当時どちらも最後まで読み切れなくて辟易した憶えがある。要するに日本ミステリのうち読み通せない作品がポケミスに入っているのだと納得し、桃源社から『殺人鬼』が浜尾四郎全集で出た時は恐れをなして手を出さなかった。実はこれだけが読み易かったのに。

さて、この目録〔第2集の1〕の奥付は昭和42年4月になっているが、同じ頁に〔第1集〕を「ご希望の方は送費¥50同封の上小社へお申込み下さい」とある。さっそく申込んだものの、すでに品切で切手¥50は返送されてきた。『宇宙から来た女』（昭和43年5月発行）が最新刊だったところだから、一年後にはもう品切状態だったのである。後になって表紙のとれた〔第1集〕を友人から有難く頂戴し、〔第2集の1〕の表紙に抱き合せて今も重宝している。これを見ると、どちらの奥付も同

一年月日だ。〔第2集の2〕は見たこともないが、No.95以降は簡単な追録が作られた程度で、実際には出なかったらしい。

目録もポケミス自体と同じくポケット・ブック判なので、内容解説も創元目録よりずっと長い。それだけ読みごたえもあるが、例えば『誘拐殺人事件』の項に「『ベンスン』『僧正』などヴァン・ダインの代表作に、優るとも劣らぬ傑作と評される長篇第十作」と嘘八百が書かれていたりするので、これは信用ならぬと思った。創元版の『誘拐殺人事件』は「巨匠ヴァン・ダインの後期を飾る力作長編」と、よほど正直である。だから目録を頼りに絶版のポケミスを獵るような真似はもうしなかった。むしろ石川喬司著『極楽の鬼』などのほうが有益だった。そのあたりから、目録狂いをやめてミステリ評論集へ興味が移行していったのである。

さらに歳月を経て、自らも評論めいたものを書きながらようになった。よく言ってブックガイド程度だが、それらを臆面もなく纏めたのが本書『推理百貨店』である。そのルーツはあの便箋目録にあったわけだが、あれよりいくらかましなものになっているよう祈るしかない。

（なおポケミス旧目録は、No.1500到達を機に、その後の分を追加して『ミステリマガジン』一九八八年一月号に復刻された。）